

日本的産業革命を興した「士魂洋才」のパイオニア

今回は伊藤博文はじめ、米欧の進んだ産業を日本に移入した肥田為良、技術者教育の向上に奔走した大島高任、

日本近代化への骨格づくりに尽力した人物たちを紹介する。

いずれも欧米での見聞を取り入れて、新機軸を打ち出した開拓者たちだ。

また人が人を育て、新しい産業を花開かせる——そんな時代が到来していた。

この使節団における第一の意味は大久保利通が参加していたことだと前回（第3話の冒頭）に述べた。

が、それに匹敵しそれを凌駕するくらいの意義をもったのが伊藤博文の参加だったことはあまり知られていない。伊藤は、大久保が1878（明治11）年に凶刃

に倒れた後、その遺志と建国の事業を継承し、殖産興業はむろん内閣制度をつくって初代の総理大

臣になり、さらには帝国憲法という明治国家の骨格をつくり議会政治を定着すべく尽力した人物であり、対外的にも日清戦争に勝利し、宿願の条約改正への道筋もつけて、日本の独立と近代化の仕上げをやり遂げた人物だといえるからである。

伊藤が実質的に真のリーダーシップをとった期間は「明治14年の政変」から総辞任までの15年間ともいえるようだが、それを可能

にした背景には、岩倉使節団の参加によって得られた拔群の広角の視野と深い見識があり、木戸はもとより岩倉、大久保という大立者の信頼を勝ち得たことが極めて大きかった。そして帰国後、「明治6年の政変」から明治10年の西南戦争の収束までの間、常に維新三傑の側近にあつてよく薫陶を得、その政治力、人間力を修得したことが伊藤を大きく成長させたと思われるからである。

英国への密航留学と米欧使節団

伊藤は大久保より一世代若く、農家に近い出身ながら志士となり、吉田松陰や高杉晋作そしてとりわけ木戸孝允に親炙して深く感化をうけ、長州藩の生死を懸ける苛烈な倒幕運動のただ中で鍛えられた。そして早い時期に英国への密航留学という絶好の機会も得て開明派の志士として頭角を現していくのだ。

明治維新になると、いきなり開港場の兵庫で外交経済の担当官となり知事に昇進、次いで中央に呼ばれて大蔵省の重要官僚となる。

人脈づくりも明るく前向き

伊藤は既述の通り、米国で条約改正の本交渉に入るといふ勇み足ともいふべき大失態を演じてしまふ。が、それにもめげず伊藤は以後前向きに着実に視察見聞の実績を重ね、大久保、木戸がベルリンから中途帰国した後は、旅の終わりまで岩倉大使の片腕として副使の役をやり遂げる。

そして伊藤は単に見聞の旅というだけでなく、旅の間にも工部省の大輔として極めて重要な仕事をしている。工部省はいわば産業化のエンジンともいふべき機関で、1871（明治4）年の段階で10寮1司から構成されていた。鉄道寮、鉱山寮、製鉄寮、電信寮、灯台寮、制作寮、工学寮、勸工寮、土木寮、造船寮、測量司である。そして当時計画していたのが工学寮の充実であり、技術教育のための優秀な教師を英国から雇うことが当面の課題だった。伊藤はその使命を果たすべく、幕末の英国留学時に知遇を得て



「横浜鉄道館蒸気車往還之図」明治6（1873）年 三代広重画。横浜開港資料館所蔵

そして同志的上司だった大隈重信とともに山積する喫緊の課題処理に奔走し、新橋・横浜間の鉄道建設にも先鞭をつけ、さらには金融財政問題が緊急課題だと認識するや果敢に米国への調査団を企画して自ら理事官となり、1870（明治3）年の末から出かける。この旅は6か月に及んだが米国側の好意的な対応もあり短期間に極めて有用な調査をすることができ、キャッチャーのようにそれを受けた大隈や井上馨や渋沢栄一が的確な改革を急ピッチですすめていくことになるのだ。

「廢藩置県」については、直接かわることはなかったが、その考えは早くから提議しており、その断行とともに新政府は、次の一手として条約改正がらみの米欧使節団を企画することになる。それはもとより伊藤の意図するところでもあり、前年からの米国調査の体験が評価され、大使の岩倉から懇請され工部省の大輔に昇格して副使の一人になりアメリカへと旅立つことになるのである。



「長州藩英国留学生写真」伊藤博文（後列右）、山尾庸三（前列右）、井上馨（前列左）ほか若き日のポートレート。萩博物館所蔵

いたヒュー・マセソン（大商社の社長）のコネで工科系教育の大御所だったウィリアム・ランキン博士に会うことができ、その縁でグラスゴー大学を卒業したばかりの逸材ヘンリー・ダイアーを校長格として招くことに成功する。そして、その人脈で数学、化学、機械、土木建築など各部門の教師7人の雇用も決めることができたのである。

そして随員だった二等書記官の林董（後に英国大使、外務大臣）をその担当とし、教師たちを同伴して日本へ赴任するようにはかっている。林はこれが縁で工科大学（後の工部大学校）の創立に深くかわり、工部省の推進者だった少輔山尾庸三（伊藤の盟友、幕末英国留学組の一人）を助けて技術者の早期育成に尽力することになる。

このカレッジは6か年制で予課、専門学、実地学からなり、当時世界でも最先端の実験的な工科教育をめざしたものであった。学科は7つに分かれ、初期の学生からは、後に活躍する錚々たる人物を輩出している。一例を挙げれば、土木の

あったので岩倉から要請されて華族授産のために日本鉄道の創設や十五銀行の創設にも携わっているが、あやまって汽車に触れ、その事故により60歳で亡くなっている。

産業近代化に貢献したサムライ

工部省鉱山助の任にあった大島高任は46歳、岩倉大使に次ぐ高齢でありすでに鉱山事業ではキャリア十分の人物だった。南部藩の侍医の子に生まれ、17歳から江戸や長崎に遊学して大砲鑄造に注目し、オランダの書『大砲鑄造法』を研究して、それを基に水戸藩や薩摩藩から依頼されて反射炉の建設にも成功していた。釜石に良質な鉄鉱石が出ると、それを使って近代的な製鉄所づくりに挑んでいるが、どうしても米欧諸国の鉱山や精錬技術を現地で学びたいと志願しての参加だった。

大島は通訳一人だけを伴いたい所をピンポイントで回り、ドイツでは鉱山学校にも通って学ぶ



岩倉使節団がフィラデルフィアで視察したフェアモント公園と造幣所。
『特命全権大使 米欧回覧実記』に掲載された銅版画より 久米美術館提供

田辺朔郎、建築の片山東熊、辰野金吾、化学の下瀬雅允、高峰譲吉、電機の志田林三郎などであり、いずれも西洋技術導入の先駆けとなり、日本の産業化に大きな実績を残すことになるのである。

肥田為良の飽くなき探求心

1872（明治5）年、使節団はワシントンに滞在中、フィラデルフィア市当局から丁重な招待を受ける。当時工業都市として最も繁栄していたフィラデルフィアは大いに歓迎してビジネスにも結び付けようとしていたのだ。ところが使節首脳は俄かに始めた条約改正問題に忙殺されており、工部理事官・肥田為良を代表に10人の団員を派遣してその好意に応えることになった。工部省派遣組からは大島高任と瓜生震、通訳として川路寛堂、長野桂次郎の4名が、大蔵省他からも通訳を含め6名が参加することになった。フィラデルフィア側では正式に歓迎委員会を組織し産業別の綿密な視察コースを作成し、実に行き届いた対応してくれた。

その視察先をみると、フェアモント公園にある上下水道設備から始まり、製鉄、鑄造、鍛造、研磨、機械、エンジン、工具、造船、ボイラー、

製氷機など。それから、農業機械、花、野菜の種子、農業、牧場。車両、クレーン、ガス、ドリル、旋盤、縫製機械、皮革、カーペット。さらには金銀宝石、美術工芸品、出版社、本屋、ドラッグストア、新聞社、造幣所、商品取引所、そして1泊2日でベスレヘムの炭鉱、鉄鉱石まで見に行き、その視察はなんと25日間で50か所にも及んだのだ。

肥田は旧幕臣42歳、長崎伝習所の出身で咸臨丸の機関掛としてサンフランシスコまで来たことがあり、造船や蒸気機関についてはすでに一級のエンジニアであった。また通訳の長野桂次郎も新見使節団に随行してワシントンまで行った組で英語も堪能だった。一行はまるで海綿のように新知識や技術を吸収し、各工場の各工程で鋭い質問を発し、実地の操作についても納得のいくまで説明を求めた。その余りの熱心さに応対側がネをあげるほどであったという。

肥田は帰国後、その知識と体験を基に、横須賀造船所長、海軍機関技監などを歴任、また経営の才も



「東京名勝開花真景 虎門工学局」港区立郷土歴史館所蔵
明治20（1887）年、浮世絵として描かれた「工部大学校」（塔のある建物は小学館〈予備科教場〉）。工部大学校から明治の文明開化に貢献する技術者が多数育っていった。

ルベッキに英語を学び、坂本竜馬の海援隊へも所属していた。そのころ土佐商会の岩崎弥太郎とも縁ができる。明治4年、19歳で工部省の鉄道寮に入り、使節団派遣に伴い工部省付き通訳として随行となる。

旅の回覧中に鉄道、交通、鉱山知識を得るが、ロンドンで使節団から離脱、留学生として3年間カレッジで鉄道の勉強をする。帰国後は鉄道寮に帰属、3年勤務した後、後藤象二郎の手掛けた長崎の鉱山事業に携わり、さらに三菱長崎（高島炭鉱）の支配人になった。



いずみ さおろう
泉 三郎

「米欧回覧の会」理事長。1976年から岩倉使節団の足跡をフォローし、約8年で主なルート
を辿り終える。主な著書に、『岩倉使節団の群像 日本近代化のパイオニア』（ミネルヴァ書房、共著・編）、『岩倉使節団という冒険』（文春新書）、『岩倉使節団—誇り高き男たちの物語』（祥伝社）、『米欧回覧百二十年の旅』上下二巻（図書出版社）ほか。

そして、東京海上保険の監査役、九州鉄道の設立や麒麟麦酒の創業にも関与する。「計画の才豊で、口八丁手八丁」といわれ、岩崎弥太郎の大番頭との評もあり、実業界で縦横に活躍した。（出所『岩倉使節団の群像』小野博正の資料より）
日本産業の近代化のプランナーでもあった伊藤博文は、時の状況を見据え適切に対応し、欧米の先進的教育や産業の導入に日本の将来のあるべき姿を見た。そして、伊藤の敷いたレールの上に多くの工学系技術者が育ち近代化を進めていくのだ。次回はその群像の続きをフォローしていきたい。